

---

# その出会いこそが始まりだった

†白夜叉†

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その出会いこそが始まりだった

### 【Zコード】

Z2588

### 【作者名】

十白夜叉十

### 【あらすじ】

攘夷戦争終結後、江戸に上京してきた銀時。

しかし、知り合い等もおらず、雪が降り凍える寒さの中、一人墓石に凭れかかっていた。

原作とは異なつております。

## 第一講「出会い」（前書き）

知つてゐ人はすみません（^\_^）

## 第一訓「出候」

……それは雪が降った日だった。

あの墓場

：

ザツサ…

砂利を踏む音が、辺りに響きわたっていた。

一つの墓の前に止まる。

それは一人の老婆だつた。

饅頭を供え、手を合わせた後、少し墓を眺めていた。

「おーいババー」

「！」

突然、墓から声が聞こえた。

低い、歌うならアルト。

「それ饅頭か？」

「食べてい?腹へって死にそうなんだ。」

ソイツは、墓の後ろにもたれかかり、座っていた。

「こりゃ私の旦那のもんだ。  
旦那に聞きたな。」

すると、ソイツは間髪いれず、饅頭を皿」と取ると、食いはじめた。

ソイツが、食べ終わるのを見計らつて、話し掛けた。

「何つってた?私の旦那。」

男は立ち上がり、言った。

「死人が口聞くか。

だから一方的に約束してもらつたわ。」

「約束？」

男が、振り返つた。

「IJの恩は忘れねえ。

あんたのバーさん老い先短いだろーが…」

男は、一旦凶切ると今度は少し声色を変えていった。

「あなたの変わりに俺が護つてやる……って。」

男は、身体中傷まみれで、血だらけだった。

「…………フフフ……ハハハ！面白いねえ。」

「わな、手廻してやるわ」

「けれど、Iの駅との出合こだつた。

「アンタ瘦せ廻れじやないかい？」

「「これが普通何じやねーの？」

スナックお姫勢の店で、男を手廻してしながら呟いた。

「はい、終わり！」

ペシッと体を叩くと、「あだつー」と呻き声をあげ、それに思わず苦笑します。

「でもアンタ、そりやほんと刀傷だろ？」

どうこうだい?』

その質問の答えを迷つてゐるのか、沈黙が流れだが、男はやつと口を開いた。

「戦」

一つの単語をぽつりと呟き、それ以降は黙ってしまった。

その空気に耐えられなくなつたのか、老婆の方から口を開く。

「まあ、話したくないなら聞く気はないよ。

その前に、あんたの名前聞いとこつかね。

その言葉に男は老婆を見、言った。

「銀時。坂田銀時。」

男の銀髪からの由来なのか、ふうんそういうのかい。と返事をすると、老婆も言つ。

「私やお登勢。源氏名だが、ババーでも好きに呼びな。」

「おう。ババア」

早速かい。ヒタバコを取出し吹かすと、銀時は、ああ。と言い、少し笑つた。

「んで、すむトコは無いのかい？」

「平たくも向も無いんだろ?」といつと、いざとなれば野宿でも向でも

平たくも向も無いんだろ?といつと、いざとなれば野宿でも向でもしてやりあ。と鼻で笑つた。

「そんなんじや凍え死んじまつよ。

何せ、こんな季節だ。」

「まーな

銀時はカウンターに頬杖をつき、言った。

「家の二階開いてんだ。

使つかい?」

と、言えば。

マジでか!ババア!…と目を輝かせた。

「ただし、家賃はしつかり払つて貰つよ?」

と、舞い上がりつている銀時に一押しすると、ケチくせーなババア。  
と言つた。

「それならその辺で凍え死ぬかい？」

「はいはい。ま、住まじて貰つ身だし、お受けいたまつまよー……」

と、ひりひりと手を振れば、

「さうしなくひやかね。

安心しな、じ飯べじこは出しある。

「おー、せりやありがてー。

「手間かねせなこでおへれよ。

「おおー



## 第一訓「出念二」（後書き）

とつあえず、第一訓、終了です。  
次回をお楽しみ下さい。

## 第一訓「万事屋」（前書き）

すいません（^ ^）

なんかすいません（^ ^）

## 第一訓「万事屋」

……

「……アンタホントに男かい？」

「何？俺を女だと言いたいのか？」

どう見たら俺が女に見えるんだ？

老い先短いどころかもう逝つちまつてんじやねーの？  
こりゃ護るも何も手遅れですってか。」

「何を1人で長々と喋つてんだい。

私やそういう事を言つてんじやないのさ。

これだよコレ。」

お登勢が差した物は、カウンターに置かれた銀時の朝食だった。

「は？」飯が何？

「え！？まさか『』飯が女に？

「オイオイもつヤベーな。」

「一、嘘から嘘に出してやろつかーー？」

：

「うひ、もうじや無くてね、アンタ、何でこんなに残してるんだい？」

確かに朝食は、茶碗に盛つてあつた白米と、魚の焼き魚、いんげんの煮物がだつたのだが、

白米は半分しか減つておらず、魚と言えど、腹に少し穴が開いたぐらい。

いんげんの煮物は、ほとんど減つていなかつた。

「もう、腹一杯」

その声と同時に、箸がピシッと置かれ、すぐに水が淹れられているコップにてをかけ、

飲み干すと、手を合わせた。

「「」駆走さん」

……

明らかに少食でいるではない。

傷の手当をしてくる時だつて思つていた。

筋肉などはしっかりついていて、たくましかつたが、

普通と比べれば、痩せ過ぎだ。

それに、この少食となれば、当たり前。

「もつと食べな。

「え? いや、腹一杯なの

「いいから食べな。

一杯食べて、太りな」

「えー、腹が一重とか嫌だぜ俺え」

「いいから。」

無理矢理でも、残りのおかずを食べさせる必要がある。

銀時は、色々愚痴つていたが、何とか食べさせる。

箸のペースがゆっくりだ。

それほど、腹が一杯なのだろうか。

「ババア、水くんね？」

ゆっくりいんげんを口に運んだ後、箸を口に加えたまま言った。

それに従い、水を「ップ」に注ぐと、銀時へ手渡した。

「サンキュー・ババア」

手渡した水を、左手に持ち、右手では猛スピードでいんげんが口に運ばれていた。

え? と言ひ顔をした。

、どうやら口に入れているだけで、食べてはいないうだ。

「何してんだいアンタ?」

「……」

無言で箸をぱってん(×)にして、「今は無理」とでも云える様な目で見た。

そして、一通りいんげんを入れ終えたかと思うと、今度は水をがぶ

飲み？一気飲み？しだした。

「…………」

ただそれを無言で見るしかない。

「ふはっ…………あ、～」

ゲフっとでも言こううな息を吐くと、問いただした。

「アンタ何してんだい……？」

れいきの疑問だ。

「あ、～、流し込んだだけ」

素つ氣なく答えると、もう一杯。とでも言つ風にコップを差し出せ

れた。

また、受け取り水を注ぐと、銀時に手渡した。

また、同じ言葉を吐くと、置いた。

「…………

魚の向かっていた箸が、唐突に止まった。

「どうしたんだい？」と聞くと、

「……こやあみ、家賃つつても、金ねーなあと黙つて

うーんとうなづきを上げた。

「働いて貯めりゃ良いじゃないか、」

当たり前。

「俺よ、何か一つの物事に執着してやんの大の筋手でや、……あーべー  
ーしょ」

箸を持った手で頭をかいた。

「アンタねえ……我慢つてもんを覚えな……」

「はあ……あ……」

ため息をついたかと思つと、今度は思つてついたかのよつて顔を上げた。

「向でも廻つてのせやーん。」

……

「…………廻るやん、…………向でも廻つてのせやーんとか……?」

「うひー」

口端を釣り上げて笑つた。

「……、アンタの事を何だかんだ詮はないと、

自分で決めたことない、まあやつてみやうとしたね。」

と、言いタバコを取出し吹かすと、銀時は、つし、決まりーと呟び、何やつブシブシと言い始めた。

いや、い」飯を食え。

そう言つてしまつたが、まあ、嘘べコトも無いだろつと思つて、様子を見ていた。

「《何でも銀ちゃん》つてのはいいだ?

植え付けているのか、質問しているのか、よくわからなかつたが、とりあえず良いんじやないかい?答える。

「やつだり?..

ん？、いや、待て待て。

なーんかしつくづこねーなあ…

そこまで悩む事なのか？

等と疑問を浮かべつつも眺める。

「そうだ！『万事屋銀ちゃん』ってのは！？」

「何で”万事屋”なんだい？”万屋”でいいじゃないか

タバコの灰を灰皿に落としながら問い合わせた。

「なーんつつたら良いのかな、

なんかよ、”万屋”だけだつたら…アレじゅん？  
ヤバイ仕事をする感じで絞られるから

”事”を入れる事で違う感じに何じゅん？わかる？

あ、わかんない？

大丈夫。俺もわからねえ

何だよ。

「一階で開くのかい？」

「セレしかねーじよ

「ま、つべにやが言わなこよ。

好きに頑張んな。」

「ア解~」

手をひらひらと振った後、やっと魚に箸かが動いた。

これがこの男、《万事屋銀ぎゃん》と言つ店の始まりだった。



## 第二訓「辻斬り」(前書き)

ひやつほーい！

## 第二訓「辻斬り」

『現場から中継でお送りします。

現場の花野アナ？花野アナあ！

「はーい。こちらが最近、近々多発している辻斬りのあつた現場です。

今回で、5人目だそうです。

犯人は未だ捕まっておらず、武装警察真選組も、捜査に協力の発言を申し上げました。

犯人の容貌は、身長が168cm、全体が黒で覆い隠されている、と発言しています。』

テレビの音が、部屋に響いていた。

その部屋のソファーに銀時。

「……辻斬り……か。

江戸つてのは物騒なこいつだー。」

万事屋開業の為の準備はもう終わっている。

そして、腰には木刀の名は《洞爺湖》。

たまたま、通販で売っていたので、下のババアに金を借りて、買つた次第である。

…

そして暇なのでテレビを観けてみれば、この事件である。

「……何の関係もなく……

ただ、…無差別に殺す

命の重さも知らないで…

簡単に奪つてゆく。」

チツ…

外道が。

もつもので氣分が悪くなつたため、外を散歩することにした。

+

「あひひ……曇つて」

万事屋の玄関を出、空を見上げると、曇天の空だった。

傘は……まあいいか。と思い、腰に木刀だけ差して階段を降りた。

「……その辺見て回るか……。」

宛てもなく、フラフラと歩き始めた。

……

…………え？ビリウドよ！

え？マジでビリウド。

付いてきてるよね？何か俺付けられてるよね？

後ろから気配と同時に殺氣ブンブンだしじょ……

『これで5人目だそうです。』

突然、頭に流れ込んだ声。

さつきみたテレビのアナウンサーの声。

5人目。

辻斬りの奪った命の数。

「…………」

その途端、体から殺気が放たれた。

そして、人気のない場所へ。

…やりやすいんだろ？

# 辻斬りのヤローさん？

1

「身長が168cm…低いですね？」

おまけに黒たあ  
：

結構立つと思つんですけどね？俺は。

「それでも捕まらないとはな。

しかも5人目だろ？

俺たちも嘗められたもんだぜ」「

ふう…と黒髪の男はタバコの煙を吐き出した。

「それでも捕まえられてないんですね?」  
ちやんと仕事やれよ土方口ノヤロー」

「あんだと口ノヤーーーその西葉も丸々お前にしも降り掛けねえ?」

「ええ?俺なんか言いましたかい?」

「てんめーべ……ーーー」

黒髪の男は額に青筋をつくり、栗色の髪の青年と口論をしていた。

何と大人気ない姿である。

「この男達こそ、武装警察”真選組”。

辻斬りの件で捜査にかりだされたまでである。

…

「結構人気のない場所来ましたね  
ま、そういう所に出やすこんでたら」

「出るとは限らないがな

あると、

ザ、ザ、ザ、

足音。

この音からするとかなり小柄だろうが、

足音のする方えと視線を送りつつ、一応隠れる事に。

すぐ近くの路地裏へと身を隠した。

.....  
銀.....?

来たのは、銀髪の男だった。

身長は黒髪の男と同じ位だらう。

小柄だらうかと思ったのは、……違つたようだ。

「……」

銀髪の後ろに、黒い男を見た。

「アイツって……！」

「間違いねえ！辻斬りのヤローだ！

あの銀髪……狙われてる……！」

そう思った時、銀髪の男は、後ろに振り返り、黒い男を見た。

「…」

「…」

あの銀髪……気付いて…

真選組達と同様、黒い男も驚いていた。

「てめーだろ

最近の辻斬りはよお…

そんなに人を殺して樂しいか?

「そんでもって……」

銀髪の男は、一旦言葉を区切つた後、また、今度はより低く、言つた。

「今度は」の俺を殺すか

背筋が逆立つほど冷たく、殺氣の混じった言葉だった。

黒い男……いわゆる、辻斬りは、刀を鞘から抜くと、構えた。

やうやくあいつも現じて。

「ヤバイぞあの銀髪……」

「どうします？」

2人が相談していたのだが、その途中に辻斬りが動いた。

銀髪の男は腰にあつた木刀を、ゆっくり引き抜くと、辻斬りに視線を向けた。

構える様子はない。

「は？ 何してんのアイツ！？？  
構えろよ！殺されるぞ！

」

なら、助けに行けばいい話なのだが、どうも銀髪の男が気になり、できなかつた。

辻斬りは、銀髪の男まで駆けると、縦に振り上げた。

ヒヨウ……！

空振りの音。

「どう振つてんだ？」

背後から男の声。

辻斬りは、途端に反応し、回りながら刀を横に斬る。

しかし、肉を切り裂く感触がない、音がない、血がない。

「うひひひひひ！」

持て余すように声をかける。

また背後から。

辻斬りは、とりあえず、銀髪の男から距離をとつた。

「何もんだ！」

辻斬りが銀髪に向かい、叫んだ。

「…………

「辻斬りヤロー！」

か乗るかなどさてねーよ

「……」

銀髪は、地を蹴り上げ、一步で辻斬りへたどり着く。

「うわあ……」

咄嗟に辻斬りは防護の構えをとる。

しかし、無駄だった。

バキンッ……！

刀は、重い衝撃を与えた後、砕け散った。

「な……あ……？？」

「…………もう戻らねえ。」

男が、一步、歩み寄る。

それに、辻斬りは、一步、後づかる。

「…………もう帰つて来ねえ。」

また前に一步。

後に一步。

「…………もう」

殺氣に満ちた顔が、また一層、険しくなった。

「…………同じ暖かさは

得られねーんだー！」

ガキイイ！！！

辻斬りを、木刀で殴り飛ばした。

辻斬りは、何メートルとふつ飛び。

「.....ぐ.....が.....」

辻斬りは、体を激しく打ったため、動かすことは出来なかった。

真選組は、ただ茫然と見ていた。

「なんで殺す？」

銀髪が辻斬りに問い合わせた。

「…………は、……なんで……殺す…………つだあ…………？」

途切れ途切れに、言葉を発する。

「たまらねえん……だよ……

命が…………魂が…………消えると…………は

ハハハハ……！……！

と、不気味に笑い始める。

「…………れ

「あ……？」

「黙れってんだよ

腐れ外道。」

ぴしゃりと言い放った。

「てめーには命の重さが分かるか？

俺だつて、お前だつてそつだ

人は、神さんが貰つた大事な命なんだ。

それは、誰も奪つちゃいけねえ

魂だつてな、1人1人違う。

誰も奪つちゃいけねえ大事なもんだ

お前に殺された奴だつて、まだまだ、ちゃんとした人生があつたかも知れない

世の中には……

生きたくても、生きられねえ奴だつていんだ。

何もできずに、死んじまつ奴だつていんだ。

そんな奴等がいるつてのに、てめーは生きているのに、

人の命を……魂を、簡単に踏みにじつた

辻斬りのもとに歩み寄ると、襟首を持ち上げた。

「その罪…………一生でめーで償いな

そして、投げた。

ある路地裏へ。

「つおい！？え！？投げやがった！－！  
そ、総悟お－－！」

「辻斬りのヤロー投げた。」

「え？ こいつ来るんだけど」

辻斬りの体は、真っ直ぐ真選組の身を隠していた路地裏に投げられた。

「…………」

銀髪の男は、無言でその光景を見る。

そして、木刀を腰に納めると、真選組に背を向け、歩きだした。

帰るつもつりしき。

「総悟……」「イイツ屯所こ」

「自分でやれよ」

「お前がやれ……」

：

ザ、ザ、ザ、ザ。

「…………」

立ち去る所としていた銀髪の男は、立ち止まつ、また振り返つた。

「……」

それに、黒髪の男と、栗毛の青年は反応する。

「…………そいつ、薬やつてんぞ」

ただ一言呟つと、また歩きだした。

すぐ、近くにかりだされていた監察、偵察の山崎を呼び、付けさせたのだが、

見事に振り払われたらしい。

「んなんだよ……あの銀髪……」

銀髪とはとても珍しいからかもしぬないが、やけに頭に残つた。

あの、紅い、燃えるよつた殺氣混じりの目は……

何の意味があつたのだろうか。

言えば、人殺しは嫌いらしい（当たり前だが）

それに、あの剣。

何者なんだろうか。

「一つ分かつてるのは、《ただ者》じゃねえって事くらいですかね。辻斬りを意図も簡単に倒した……気になりますア」

それは俺も同じ事だ。

…… ポツ…

空は、夕立を迎えるようとしていた。

「……魂……か……。」

銀時は、天を仰ぎ見ると、ポツリと呟いた。

本当は、俺が…言える立場じゃねーのにな…

「何十人、何百人、何千人との命を奪っている俺に…

」

あえて、過去形ではなく、現在進行形で表す。

何故かつて？

命はもう、戻りはしないからさ。

もう過去だからと書いて、綺麗さっぱり無くなるわけでもない。

苦しみは、死ぬまで俺を責め続けるんだ。

第二訓「辻斬り」(後書き)

あやつほーい！

## 第四訓「攘夷志士」（前書き）

できた！更新できた！

奇跡だ！

## 第四訓「攘夷志士」

猫探し。

それが万事屋での最初の初仕事だった。

「どうせならもつと、何かパーと、した仕事が良かつたよな、うん。

」

1人領きながら受話器をチソッと戻すと、寝巻から流水模様の着物に着替え、

木刀を腰に差すと、黒いブーツを履き、万事屋を出た。

「えーと、黒い猫で…目がグリーンアイ…

首輪には鈴……。」

長くならぬうだなと内心思いつつ、猫の居そうな路地裏へと足を進める。

「暗いな……、ま。大丈夫だろ」

と、中に入った。

「ゴジ……ドガシャア！」

「…………ってえ……マジか……」

何で大丈夫と発した途端にこんな仕打ち……」

何かに詰ま付いて、周りの「ミニ箱等と一緒にすりゴロゴロ」でしまった。

「いたた……何なんだよ」

足に詰ま付いた出あるう丸い球体を、手に取った。

4

えーと

5

「」

パラ

パラ

パラ

パラ

——| 000000

この数字は何？

3

あり、残り3秒切った

2

1

0

ヒュアツツー！

俺の反射神経が、役に立ったみたいだ。

ドガアアアアアアン！！！

パラパラ……

えーと……咄嗟に身の危険を感じて空に投げたもの……

空には真っ黒な黒煙。

間違いない。爆弾だ。

だつてさ、カウントダウンが……

まいいか。

ひとつあえず、すうひとじじいれば、警察やら一杯来るのさ予想できてる。

俺は足早にその場を去ることに。

する」と、

「あつちだ！追え！」

「逃がすなあああ！！

近くから小さな叫び声が聞こえた。

「何だ何だ……？」

「うせり、何かを捕まえようとしているらしい。」

もつとも、俺には全く関係無いのだが、

爆弾の事を聞かれると疑われるのが目に見えてくる。

身を隠すのが打って付け。 ってな。

屋根へ飛び立つと、上からので、歌舞伎町がよく見える。

しかし、さっきの爆弾での黒煙がまだ残っているのか、焦げ臭く、  
息苦しかった。

まあ、状況確認として、さつきの叫び声の人物を捜すこととした。

……アイツ等か……

黒服の団体が目に入った。

……そういえば……

前の辻斬りの件の時……同じ黒服の男がいたな……

黒髪の奴と栗毛の奴……

警察かなんかだろう。

いかにもな感じだったし……

つて事は、あの黒服の団体も同類な訳で、……。

どうしよう。俺ヤバくない?

「攘夷志士を追え!」

「見逃すな!」

攘夷志士？

.....。

なら……その攘夷志士と……俺は同類な訳だ。

「……………」

といふえずその攘夷志士とやらを捜す。

「あの言い方からすると……近くには面るみてーだな」

独り言を呟きながら屋根を渡る。

発見。

「……………」

「……………」

「……………」

ま、上から見ちゃあ…バレバレなのが。

その攘夷志士のまほ真上に移動し、一気に飛び降りた。

音もなくスタッフと着地すると、その攘夷志士は俺の存在に気が付き、刀に手をかけた。

「安心しろよ

……来い、身を隠したいんだろ?」

初対面の男に向かって安心しろといはおかしな話だが。

男は柄にをかけた手を、ゆっくり落とした。

それを見届けると、歩きだす。

後ろから気配がするからには、付いてきてこらのだろ。

「安心しりよ

……身を隠したいんだろ?」

いきなり真上から現れ、声をかけた相手には、見覚えがあった。

微かに差し込む光で、髪は銀色に光っていた。

そして、俺に向けられて いる 紅い目。  
深みのある色だ。

そして 低く、今までずっと耳にしていたであろう「」の声。

銀髪の、見覚えがある男は、突然歩き出したので、慌てて後を付いていった。

すると、少し薄暗い場所にたどり着く。

「ここなら大丈夫だろ  
あんまり人来ねーんだ。

じゃな、精々捕まらぬよう」「

銀髪の男は、手を挙げ、ひらひらと振りまた歩きだした。

その時俺は、口を開かずにはいられなかつた。

「銀時……か？」



第四訓「攘夷志士」（後書き）

わあ、誰でしょう？

ヒヤツホオオオオイ!

15%だったのが50%まで出来たんだぜ！？

# 1日でだぜ？！

え？他の50%はどうしたのかって？

そりやあ その

アレだよ。

## 第五訓「再会」

その言葉を発せられた瞬間、銀髪……、こ。せ。

銀時が立ち止まつた。

やつべつとこひかりて振り返つた。

「……てめーは……

「ジ、ラ……？」

何時もと変わらぬ一ヶクネームで呼ぶ彼の姿を見、  
懐かしさと、今ここに居ると重い実感が溢れてきた。

「ジラじやない……

桂だ

このやうとつ出でやべ、もつ訪れることがないだらうと思つてゐた。

そひ、この攘夷志士とは、銀時とかつての盟友、

桂 小太郎だつた。

……

「久しぶりに会つたかと思えやべ……

攘夷志士だのなんだのくだらねー」としてたの

近くの段差に2人は座っていた。

「それはこっちのセリフだ。

戦が終わると共に、姿を消して

……万事屋などと、くだらなこことをしあつて……

ふう、っとため息をついた。

銀時はただ前をボーと見ながら会話する。

「俺は自由気ままな奴だから……」なんんでいいんだよ。」

……相変わらず……つてところだらうつか。

「……銀時、……攘夷をする気はもつ無いこと?」

「…………」

質問には答えず、ただ前を見る。

「…………もつ一度、俺と一緒に来ないか?」

攘夷戦争後期、『白夜叉』と怖れられたほどのお前だ。  
お前が来れば、この江戸にいる天人だって、  
あの忌まわしきターミナルだって、  
潰すのは簡単だらう?』

恐らく、来てくれるだらう、お前なら。

その思いを、心に秘めていた。

「断る」

予想外な言葉が俺の耳に届いた。

その言葉に、銀時へ向く。

「何故だ銀時！？」

お前は元々こいつちだつた筈だ！！」

「…………俺は

ずっと前に向けられていた視線が俺に向く。

「この国のために戦つた覚えはねえ。」

「幕府のためなんざに戦つた覚えはねえ。」

「そもそも…………」

「復讐のために戦つた覚えは……」

「一つ足りともねえ。」

「…………ッ！－！」

そのまま呆然としていると、銀時が立ち上がった。

《復讐》

そのまま呆然としていると、銀時が立ち上がった。

「じゃな。やつをと捕まつちまえよバカ。」

手をひらひらと振り去ってしまった。

「……………  
復讐のために戦つた覚えはない……………か

はあ……………。

やはり変わってはいないのか……………。

……………

『何故だ銀時！？

お前は元々こっちだつた筈だ！！』

…… そつだ。

俺は……そつちの筈だつた。  
だが、今と昔の攘夷戦争とは違つんだよ。

目的が。

お前達は、今と同じ思いだつたのかもしけねえ。

『天人潰す、消す、殺す』

……

俺は違つ。

天人を潰すために戦つたんじやねえ。

ましてや、……『先生』の復讐のために戦つたんじやねえ。

あいつらを……仲間を

護るために戦つた。

俺達侍の剣は、人を斬るために使うんじゃねーんだよ。

自分を、己を、

魂を、護るために使うんだ。

アレだよオオオ！－！－！－！

わからん！

ああ、！？わかんねーだあ？！

空氣読三……字読めコノヤローーーーー

あーあー！ そうです！ 白紙ですーーー！

何か問題でも！？

## 第六訓「真選組」（前書き）

「——んに——ちわ——！」

お久しふりふりですか（・・）ノ

では続きをどうぞ！

## 第六訓「真選組」

ある朝、武装警察真選組の朝は、騒がしい限りである。

ドッカアアアアンーー！

「総悟オオオオーーー！」

お決まりの爆音と、真選組副局長 土方 十四郎の叫び声と、  
呼ばれてくる古前の主、真選組一番隊隊長 沖田 総悟の仕業？で  
あるのだ。

「相変わらず騒がしいな。毎度毎度、飽きず！」  
ハツハツハツ！

そして、その様子を楽しそうに眺める真選組局長 近藤 勲。

「いやいや、止めましょーーー！」

屯所が大変な事になりますよーーー！」

それにはかさずツツツツを入れる真選組隊士 監察役 山崎 退。

「死ねエエエエ土方アアア！」

「お前が死ねエエエエ！！！」

「俺は総悟に起こしに行かせただけなんだかな。」

「いやいや、ダメでしょ！？

起こしに行かせる事態夕方でしゅう！！？

食堂

ブチユう

カツ丼にマヨネーズをぶっかける土方。

「おれ」

隣に居る隊士は、一目散に去る。

「土方さん、いい加減にやめたうどいなんですかイ」

「何をだ」

「スッスッス」

マヨネーズをかけ切ると、フタを閉め、割り箸を割る

「その犬の餌をでさア  
只でさえ吐きそつなのに、朝から食うたア嫌がらせですかイ」

「バカヤロー犬の餌じゃねえ。  
カツ丼土方スペシャルだ」

「はあ…」

総悟はため息を吐き出す。

「所で総悟。」

「何でイ」

「あの件はどうなった?」

「ああ、辻斬りの件ですかイ?」

ありやあ間違いなく辻斬りでしたぜ

容姿もそのまま。

それと……

言葉を止める総括い、土方は顔を向けた。

「何だ?」

「……、あの銀髪が言つてた通り、薬をやつしてました

「……」

薬……

『やつて、薬やつてんぞ』

あの時の薬葉が頭をよぎる。

「銀髪……か。」

「仕事も減つて楽っちゃあ楽ですがね。」

「そうだな。」

「辻斬りがいなくなるだけでこんな平和何ですねイ？」

：

軽く返事をし、土方に付いていった。

「ハイハイ」

「行くぞ総悟。」

「つよし、飯も食った事だし…見回りにでも行くか。」

+

「てめーは向こもしてねえだろおが！！

「ひつかつつーと画寝がお前の仕事だろ」

よく分からぬい会話をしながら（恐らく辻斬りから仕事の話に変わつたんだろう）、

見回りをするため江戸を歩く。

確かに……平和なもんだな……。

周りを見回しながらふと思つてしまつた。

「あっ、「ララー！待ちやがれーーー！」

「うおっ！」

突然叫び声が。

それと同時に黒い猫が路地裏から飛び出してきた。

目がグリーンアイだ、さぞ珍しい猫なんだろう。

と、後を追うよつて猫に連れて男が飛び出しついた。

「…………アイツは……」

「オラ！…捕まえたぞ。

観念しやがれ

…………んあ？

「ひに氣付いたよつだ。

猫を片手にひりひり振り返つた。

その男は、銀色の髪を風に遊ばされながら紅い目が俺たちを捕えた。

『…………そいつ、薬やつてんだ』

あの辻斬りの件の男だった。

「総悟……」

「分かつてまさア……」

「え? 何?」

意味が分からぬ様な顔をし、子首を傾げる。

「イツには聞きたい事が山ほど有るんだよ。

いや、…山ほどはないか。

「お前、ちょっと来い」

土方が男に話し掛けた。

「はあ? 誰スかアンタ等」

「…?」

な、たつた数日で人の事……忘れやがった?!

「アンタが、辻斬り倒したんじゃねえですかイ」

まるで何も無いかの様に平然と聞く総悟。

「辻斬り?」

その言葉に、男はその紅い目を細めた。

「…………確かに俺だけビ……」

「…………あ、あん時の黒服つ……！」

やつと思いつ出したかの様に指差す。

いや、差すな。

「…………で、何で俺がアンタ等と一緒に行かなきやいけない訳?  
俺は今からまだ仕事があるんだよ。」

え?何?ナンパ?

あ、「めん。そつちの趣味ねえんだわ俺。」

「めんね～等と色々言いながら猫を懐に優しく入れた。

え？ 懐！？ 等と思つたがまあいい。

「俺もねえわ！！

何でてめー見たいな奴ナンパするかつ！！」

はあ、とため息をついた。

「とにかく、お前には辻斬りの件といい、聞きたい事が色々有るんだよ。」

「いや、俺は無いからいいわ。」

と、片手をあげる銀髪。

「てめーの意見なんぞ聞いてねーんだよつー。  
お前には無くても俺等には有るんだよー！

有るんだよ使つたの何回目ーー?」

勝手にシシ「ミミながら怒る。

「だからね、俺これからまだ仕事なの

「めー等に話す事なんざない。」

きつぱり言い切ると、また最初に飛び出してきた路地裏に戻らうとしていた。

「武装警察《真選組》。」

土方が男に向かって言い放つた。

「……」

男が振り返る。

「俺達は《真選組》だ。」

一緒に来てもらおう。」

「…………

男はその紅い目を細め、睨むかのよつて、じつと土方達を見ていた。

## 第六訓「真選組」（後書き）

『最近暑くなつてきましたなあ（^ ^）』

## 第七話「取り調べ」（前書き）

かなり前に書いた小説なんですが、文才今よいかなり無いですが…

（ 、 ； ； ）

短いです m ( — ) m

## 第七話「取り調べ」

武装警察真選組。

彼らは一人の侍を捕えた。

...

取調室に銀髪を入れ、あの猫は依頼主に引き渡した。

「まずは、名前を聞いておこつか

土方が向かいに座つて頬杖を付いている銀髪に面つ。

「……坂田銀時」

それだけをダルそうに、田は相手を見据えたまま、答える。

「職業は？」

「万事屋」

「歳は？」

「20手前」

「.....」

「.....」

やうううううううううううう

何なんだよこの天パ！！！

むひかせやつじへこんだナビー！

はあああ  
：本題に入るか。

「おまえは何者だ？」

「一般人」

Г

Г

一般人があんな辻斬りアツサリ倒せるかつての！！

はあああ  
``

「何で、あの辻斬りが薬をやつているとわかった？」

「見りや分かる」

分かるわけねーだろおおおがアアアアア！－！－！

俺でも分からなかつたのに－！  
ハつ当たりじゃないけど－！－

つくそ、埒があかねえ。

「土方やーん、どうなんディ」

いきなり、取調室から栗毛の青年。

総悟だ。

「ああ？……ああ。」

「いや、返事だけじゃあ、分かんないっすよ」

そいつて、総悟は万事屋に目を向けた。

「髪が銀色だなんて、珍しいお人でさア

それに、辻斬りをああもアツサリやつちまうなさア。

「アンタ何者でイ」

「だから一般人。」

「てめー、いつまで言つてやがる」

さつきから質問攻めで飽きたのか、ため息をつく万事屋。

「…………。」

「俺が一般人じや無かつたとしても、アンタ等には関係ねーだろ」

その一言に、2人は黙る。

「…………。」

「手合わせ願つても良いですかイ？」

「はあ！…？？」

「？？」

突然総悟がきりだした。

「俺アこれでも真選組一でねエ

アンタと手合わせしたくなりましたぜ。

「

「何勝手に言つてんだ！！」

そんな土方を無視し、総悟は続ける。

「もちろん、俺に勝つたら、見逃してやつてもいいでさア」



第七話「取り調べ」（後書き）

ほんつと短いなー（・・・）ノ

ではでは

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2588j/>

---

その出会いこそが始まりだった

2010年10月11日17時46分発行